

女体化

屈辱と快楽の強制性転換

捜査官イブキ



18
未 満

挿絵/どうゆーおんどー
上田なかの

試し読み版

序章	特犯捜査官	006
第一章	女になった捜査官	019
第二章	ナイトプールに潜入せよ	073
第三章	疑惑の科学班	113
第四章	女にされる捜査官	174
第五章	堕ちる捜査官	225
第六章	すべてをさらけ出す女捜査官	256

登場人物紹介

Characters



みずしろ いぶき

水城伊吹

特殊犯罪捜査庁に所属する捜査官。とある任務中に敵に使われた薬品によって女体化してしまう。

♀



♂



すずかぜいづも

涼風出雲

伊吹とコンビを組む頭脳派の捜査官。考えが足りない伊吹に呆れつつも、相棒として信頼はしている。

序章 特犯捜査官

「どうやら間違いないみたいだな」

N県U市の山中に建てられたとある工場——その内部に潜入した水城伊吹は三白眼を不機嫌そうに細めながら、目の前に広がる光景に肩を竦めて見せた。ただ、肩を竦めた状態でも身長一八〇センチを超える身体はかなり大きい。

様々な装置が並べられている。その中の液体がごぼごぼと泡立っている。蒸溜でもしているのだろう。表向きここで作られているのは石鹼とのことだが、とてもそうは見えない。「ビンゴか」

伊吹の隣に立つ相棒の涼風出雲が淡々と呟いた。抑揚のない声。声だけならば冷静そのものといつていいだろう。だが、眼鏡の下の瞳には明らかに怒りの色が浮かんでいた。

そんな自分より五センチほど背が低い相棒の姿に口元にフツと笑みを浮かべつつ「で、どうする? って、考えるまでもねえか。工場ごと爆破——それで構わねえな」と伊吹は低い声で告げた。

情報通りならばここで作られているものは違法薬物。こんなものを放置できない。跡形

もなく吹っ飛ばす。

「は？ 何をいつてる？ 馬鹿か」

だが、出雲からの返事は本当に呆れているかのようなものだった。

「ああん？ 馬鹿ってなんだよ馬鹿って」

「お前のことだよ伊吹。爆破する？ 短絡的すぎるんだよ。もう少し物事は大局的に見ろといつもいつてるだろ。僕達がやるべきことは応援の要請だ。この工場内のものを差し押さえる。薬の成分を調べ、工場の背後関係を洗う。バックについてる組織そのものを潰さなければこういうことは終わらないからな。それくらいお前だって理解できるだろ？」

「う……あ……それは……まあ」

冷静な口調で言葉を重ねてくる。正直気に食わない。だが、出雲の言葉は正論だ。言い返すことはできず、伊吹は口籠もることとなってしまった。

「そういうわけだから一度引くぞ。ここの連中に気付かれる前にな」

そういうと出雲はすぐさまこの場から立ち去ろうとした。

けれど、そんな相棒の動きに伊吹は同調しなかった。この場に立ち尽くす。

「どうした？ 早く脱出するぞ。潜入に気付かれたら面倒だ」

「確かにな……。面倒なことになりそうだ」

静かに呟く。

「ん？ どういう意味だ？」

出雲が首を傾げる。相棒のそうした反応に伊吹はクスツと笑みを浮かべた。

「お前にしては察しが悪いんじゃないか？」

「……………まさか」

伊吹の意図に気付いたような表情を出雲が浮かべる。

「そういうわけだ。お客さんがいらっしやっただよ」

相棒に淡々と告げる。

するとその言葉に反応するかのようには、五人ほどの男達が伊吹達の前に姿を現した。一人はスーツ姿。一見するとただの会社員といった風貌である。けれど、間違ひなく堅気の人間ではない。その証拠に、男が引き連れている他の四人の手には銃が握られていた。服もいかにも警備員といった感じのものを身に着けている。黒を基調とした圧迫感がある制服だ。

「……………本当に侵入者だ。お前達……………何者だ？」

先頭に立つスーツ男が尋ねてくる。銃を持った男達を引き連れているという圧倒的優位な状況だからだろうか？ 男の表情はどこか楽しげにさえ見えるものだった。その男に対

し、伊吹も敢^あえて笑みを浮かべて見せる。

「俺達か？ 俺達はこういう者だよ」

同時に胸元から手帳を取り出すと、それを男達に突き付けて見せた。

「手帳？ 警察か？」

これにスーツ男は僅^{わず}かだが驚いたような表情を浮かべる。

「……お前ら下っ端か？ 何故ここに来た？ あり得ない」

更にはそのような言葉を重ねてくる。

「なるほど……。警察の捜査はあり得ない——か。情報どおり警察上層部とも繋がりがあ
る組織ということで間違いないようだな。まあ、だからこそ僕達が動いているわけなんだ
けどな」

反応したのは出雲だ。

「どういう意味だ？ お前ら……警察ではないのか？」

相棒の言葉にスーツ男が首を傾げる。

「そういうことだ。俺達は警察じゃない。俺達は特犯捜査官だよ」

今度はそれに伊吹が答えた。

「特犯捜査官？」

聞き慣れない言葉だったのか、不可解そうな表情をスーツ男は浮かべる。けれど、それは一瞬だった。すぐにハッとしたような表情を浮かべ、マジマジと伊吹達を見つめてきた。「特犯捜査官……：そういうえばボスから警告を受けた覚えがある。特殊犯罪調査庁……：警察とは別系統で動くという組織と聞いたことが……。実在していたのか」

呆然と眩く。

スーツ男のその言葉に、出雲が一瞬何かを思案するように眉間に皺を寄せた。けれど、伊吹はそうした相棒の反応を気にしない。

「そういうわけだ。お前らが警察と繋がっていようがいまいが関係はない。俺達の捜査には令状も何も必要ないからな。俺達は俺達独自で動く。てめえらはもう終わりだ」

不敵な笑みを浮かべてスーツ男に告げた。

特殊犯罪調査庁——通称特犯庁。名前だけ聞けば政府の組織のように聞こえるだろう。だが、現実はずう。特犯庁は民間の有志によって秘密裏に作られた組織である。仕事は単純、令状を取らなければ、事が起こってからでなくては動けない警察に代わり、犯罪の事前阻止、もしくは疑わしき犯罪者の捜査などだ。いや、それだけではない。警察が手出しできない組織の壊滅や、権力者などの逮捕も行っている。つまり、今回のように警察と繋がりがあがる者達を叩き潰すのが仕事というわけだ。

「……なるほどな。だが……俺達が終わりつてのは間違いだな」

「へえ……なんでだ？ こうして犯罪の証拠は押さえられてるんだぞ」

「確かにその通りだ。だが、ここにいる捜査官様はお前達二人だけ。そして、ここは電波が入らない。つまり、まだ他の仲間にごこのことは伝えられていないんだろう？ ということは……お前達さえ消してしまえばそれで終わりつてわけだ」

どこまでも余裕の表情を浮かべつつ、スーツ男は背後の四人に目配せをした。四人が動き出す。両手で握っていた銃を構え、銃口を伊吹達へと躊躇うことなく向けてきた。

「……確かにその考えは正解だな」
素直に出雲が頷く。

「二人だけというのは失敗だったな」

スーツ男が勝ち誇った。

「いいや、失敗じゃない。僕は必要十分な戦力は連れてきているよ」

けれど、出雲は動じない。それどころか圧倒的戦力差があるという状況だというのにまるで気にすることなく微笑みさえ浮かべて見せた。その上でチラッと眼鏡下の視線を伊吹へと向けてきた。

「こういう時の為のお前だ。しっかり働けよ」

「いわれるまでもねえよ」

出雲の言葉に伊吹は頷く。

それと同時に――

「四人じゃ足りねえな。俺達を始末したかったら……その一〇倍は――必要だよっ!!」
動き出す。

タンツと伊吹は横に飛んだ。出雲は男達の視界から外れるようにしゃがみ込む。

「チッ! やれっ!」

スーツ男が部下に命じた。

一斉に男達が動き出す。彼らの握る銃の銃口が伊吹へと向けられた。

「遅いっ!」

対する伊吹はまったく動じることなく懐ふところから銃を引き抜くと、男達の動きよりも速く引き金を引いた。

ドンドンドンツと銃撃音が工場中に響き渡る。

「あつが!」

「がああああつ!」

途端に男達は苦痛の呻き声を響かせると、銃を撃つことなくその場に倒れ、動かなくな

った。床に血だまりが広がる。

「なっ!？」

スーツ男の顔に驚きの色が浮かんだ。

「わりいな。俺達は警察じゃない。だから……こういうことも躊躇わない。犯罪組織は潰す。どんな手を使っても。それが俺達の——特犯捜査官のやり方だ」

「な……舐めるなっ!!」

笑う伊吹に対し、スーツ男が懐から銃を抜いた。銃口を向けてくる。当然伊吹もそれに反応する。スーツ男に対し素早く銃口を向けた。その動きは敵のものよりも遙かに速い。

「殺すなよ。そいつには聞きたいことがある」

「わーってるっつの！」

緊迫した状況。けれど、相棒の言葉に余裕の態度で頷きつつ、伊吹は再び引き金を引いた。ドンツと響く銃撃音。それと同時に男が握っていた銃が飛んだ。

「ぐあああああ！」

スーツ男の口から苦痛の呻きが漏れる。苦しそうな表情を浮かべるスーツ男。彼の手は血で真っ赤に染まっていた。

「銃の扱いは得意なんだよ。お前みたいな素人には負けない。チェックメイトだ」

これで終わり。最早スーツ男に抵抗力など残っていないだろう——勝利を確信する。
「ぐ……な……舐めるなよおおっ！」

だが、敵はまだ諦めてはいなかった。懐から何かを取り出し、それを投げつけてきた。
「チッ」

反射的に伊吹はそれを撃つ。

瞬間、その何かが爆発した。

「うおおおっ！」

煙のようなものが広がる。その煙に伊吹は呑み込まれることになってしまった。

「伊吹っ!？」

流石さすがに想定外の事態だったのか、出雲が焦ったような声を上げる。

「ははは！ 終わりだ！ それはそ……組織が開発した新型の毒ガスだ。くううう……。」

まだ試作段階だが……それでも……お前を殺すくらいは問題ないはずだ」

スーツ男が笑う。勝ち誇ったように……。

けれど、そんな嘲笑を打ち払うかのように——

「わりいな。こんなもんで俺……オレは止められねえよっ！」

広がるガスの中から伊吹は飛び出した。

「なにつ?!」

今度こそ完全にスーツ男の表情は固まる。

「試作品か……。どうやら思ってたような効果は出てないみたいだぜ！ オラアアッ!!」
拳を握り締めると、硬直したスーツ男の顔を躊躇することなく思いっきり伊吹はぶん殴った。体重を込めた一撃。スーツ男の身体が吹っ飛ぶ。近くの壁に背中から激突し、男はその場に倒れた。そのまま動かなくなる。

「ふうううっ……。これで終わりだな」

倒れたスーツ男を睨みながら、伊吹は大きく肩で息をした。

「大丈夫か伊吹？」

隠れていた出雲が駆け寄ってくる。

「ん？ ああ……。問題ねえよ」

ニイツと笑って見せた。

「それならいいが……。あまり油断はするなよ。心臓に悪い」

「確かにな。毒ガスとやらが本当に効果を發揮してたらマジで死んでたかもだしな」

「そうだぞ。はあ……」

戦っていたのは伊吹だ。けれど出雲が疲れたようにため息をつく。そんな相棒の背中を

バンバンッと伊吹は叩いた。

「まあ何にせよ事件は解決。よかつたじゃねえか」

「それは確かにそうだがお前はちよつと油断しすぎ——」

出雲の言葉が途中で止まる。いや、ただ言葉を止めるだけじゃない。ポカンと口を開け、瞳を見開いてマジマジと伊吹を見つめてきた。伊吹と出雲との付き合いは既に二年になる。けれど、こんな顔は今まで見たことがない——といつても過言ではないくらい、相棒の表情は呆けたものだった。それになんか変だ。いつもより出雲がでかく見える。身長は伊吹の方が高いはずなのだが……。

「ん？ 如何どうしたんだよ？」

一体何でこんな顔をしているのかが理解できない。

「いや……だって……お前……その……身体……」

「身体？」

どういうことだろうか？

首を傾げつつ、自分の身体に視線を移す。

「——へ？」

そこで伊吹も間の抜けた声を漏らすこととなった。



何故ならば、これまでなかった膨らみがあったからだ。自分の胸元に……。まるで女のように……。

「え？ なに……これ……え？ えっ!! ええええっ!!」

わけが分からず声を上げる。

その声さえも、これまでのものとは変わっていた。甲高いものに……。そう、男の声ではない。間違いなくそれは、女の声だった。

「ん？もしかして貴女……知らなかった？ここはね、女同士のカップルが生まれることと有名なプールなのよ」

「お……女同士のカップルが生まれる？え？それってどういう……って聞くまでもないよな」

周囲の光景を見れば一目瞭然だ。

「うん、そういうこと。だからね……」

黎の瞳が潤んだ。いや、ただそれだけじゃない。ゆつくりと伊吹との距離を詰めてきた。胸と胸が触れ合うほどの距離だ。

「あ……これ……黎さん？」

目の前に美人の顔がある。どんな反応をすればいいか分からない。呆然と立ち尽くしてしまう。すると黎はそんな伊吹に対して「本当に可愛い」と呟くと共に、ギョツと身体を抱き締めてきた。乳房と乳房が強く密着する。胸が胸で潰される。同時に黎の温かな体温が伝わってきた。

「私……貴女のこと気に入ったわ。だから……いいわよね？」

「それは……その……」

良くない。あり得ない。出会ったばかりだというのにいきなりこんなこと普通あり得な

い。ここは拒絶しなければならぬ場面だ。第一、ここには捜査をしに来たのだ。こんなことをしている場合ではない——と、頭では理解している。しかし、拒絶の言葉を口にすることはできなかった。

何故だろう？ 抱き締められていると、黎の温かな体温と水の冷たさを感じていると、身体中が燃え上がりそうなほどに熱くなっていく。胸の高鳴りも大きなものになり、何故か分からないけれど酷く喉が渴いた。それと共に、強くと強く抱き締めて欲しいという思いが膨れ上がってくる。自然と黎を受け入れるように抱き締められるがままに全身から力まで抜いてしまう自分がいた。

そうした反応に黎は満足そうな表情を浮かべると共に、ゆっくりと伊吹の唇に自身の唇を寄せてきた。

「んっ……」

「んふううっ」

そのままキスをする。黎の柔らかな唇の感触が伊吹の唇に伝わってきた。

（あ……これ……これが……キス？）

恋人がいなかった伊吹にとって、生まれて初めてのキスだった。

（なんだこれ……嘘だろ？ 唇……唇と唇を重ねてるだけなのに……。凄く……。ああ……

凄く気持ちいい)

唇の感触を味わっているだけだというのに、全身が蕩けそうなほどに心地いい。更に伊吹の身体から力が抜けていった。

「んふふ……んっちゅ……ちゅうっ……ちゅっちゅっ……ふちゅうっ」

そうした反応に黎は満足そうな表情を浮かべつつ、更に口付けを繰り返してきた。唇を啄むように、幾度も幾度も口付けしてくる。初めてのキス。それがこんな形でなんて……。異常で異様だ。けれど、それが心地いい。しかも、キスはそれだけで終わりではなかった。

「はっちゅ……んっじゅ……ふじゅっ……んっちゅる……むちゅうう」

(あ……あああ……これ……マジか？ 舌……舌が……中……。オレの口……かき混ぜてくる)

口腔こうくうに舌まで挿し込んでくる。伊吹の口内を蹂躪するように、ねっとり舌をくねらせてきた。グチュグチュという淫靡いんぴな音色が響いてしまうことも厭いとわない。口腔粘膜を舐めるから回し、歯の一本一本をなぞるように舌先をくねらせてくる。当然のように舌に舌を擽めるなどという行為だとしてきた。その上で頬を窄めてジュルジュルと口を啜すってくる。黎の口付けはあまりにも生々しく、濃厚なものだった。繋がりが合った唇と唇の間から唾液が零れ落ちてしまうほどに……。

（あり得ないだろ。いきなりこんなこと……。つてか、駄目だろ。一応今、オレ、女なんだぞ。女同士でこんな……。それに、今は……。ふうう……。捜査中で。こんなこと……。してる暇なんてないんだぞ）

拒絶しなければならぬと理性が訴えてくる。だが――

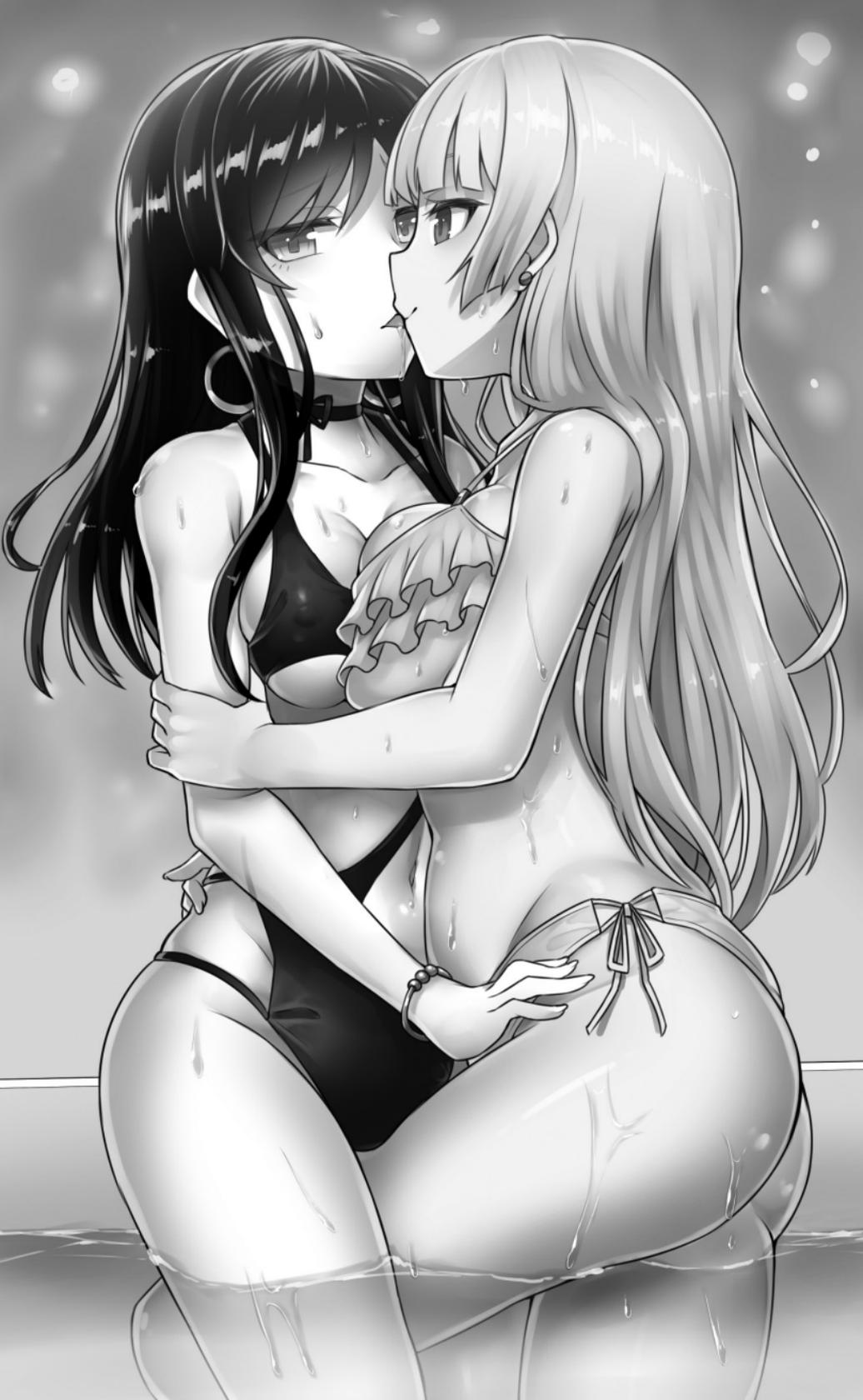
（駄目なのに……。こんなこと……。でも、これは……。やつばい。マジで……。ヤバい。こんな……。ああ……。キスってこんなにいいものだったのか……。凄すぎる……。）

繋がりが合っているのは唇だけだ。そのはずなのに全身が蕩け、黎とひとつに混ざり合っていくような感覚さえ抱いてしまう。思考まで溶けてしまうかのような心地よさに、伊吹もほとんど無意識の内に舌を動かし始めた。理性が快感に溶かされていく。

もつと感じたい。もつと深く口付けをして欲しい――とでも訴えるように、自分からも強く唇を押しつけてしまう。ただ抱き締められるだけではなく、自分からも黎の身体を抱き締めたりもした。

「んふうう……。いいでしょ？　こうやってキスするの……。凄く気持ちいいでしょ？」
一度唇を離し、囁くように黎が問いかけてきた。

口唇と口唇の間にツプツと唾液の糸が伸びる。そんな光景により興奮が煽られるのを感じた。同時により頭がクラクラしていく。伝わってくる水の冷たさが身体に染み込むよう



な感覚。それに反比例するように何故か全身が熱くなり、思考が蕩けていくような気がした。そうした感覚に流されるかのように「ああ……いい。凄く……気持ちいい」コクンツと素直に首を縦に振ってしまう。

「そっか……でも、まだ満足しないですね。もっとも……伊吹さんのことを気持ちよくしてあげるわ。伊吹さんだって……もっと良くして欲しいでしょ？」

「そ……それは……」

断らなければならぬ。ここには捜査で来ているのだから——と、理性ではもちろん理解している。しかし、分かっているはずなのに、何故か拒絶しようと本気で思うことはできなかつた。

それどころか黎の言葉通りもつとして欲しいという思いが抑えがたいほどにわき上がってくる。心臓が早鐘の様に高鳴り、水に浸かっているとは思えないほどに全身が熱く火照り、疼いていった。

同時に思い出してしまふ。電車の中で刻まれた性感を……。

あの日以来、何度あの快感を思い出してきただろうか？ 男では感じる事ができなかつた絶頂感。あの快感をもう一度と何度願ってしまっただろうか？ ここで黎を受け入れればもしかしたらまた、あの快感を刻んでもらえるかもしれない。そんなことを考えてし

まう。そしてその欲望を振り払うことは、今の伊吹にはできなかつた。

「して……欲しい……」

膨れ上がる劣情に想いに流されるように、コクツと頷いてしまう。

「ふふふ、分かつたわ。沢山……感じさせてあげるわね」

願いに応えるように、再び黎が口付けしてきた。しかも、今度はただキスをしてくるだけじゃない。肢体を撫で回すように手を動かし始めてくる。剥き出しになった伊吹の背中を指でなぞるように刺激を加えてきた。もちろん背中だけでは終わらない。太股も撫でてくる。引き締まったくびれも擦り上げてくる。かと思うと尻を揉むなんてことまで……。

黎がそうしてしてくる行為は電車内で男達がしてきた痴漢とそれほど変わるものではなかつた。ただ、力加減が明らかに違つた。

男達の行為はどこまでも自分本位だつたというべきか。本能の赴くままに一切加減することなく胸を揉み、尻を捏ねくりまわしてきた。けれど、黎は違う。彼女の手つきはどこまでも優しいものだつた。割れ物でも扱うように優しく優しく、伊吹の肢体に愛撫を重ねてくる。まるで鳥の羽で全身を撫で回されているかのような錯覚に陥るほどに、手つきは繊細なものだつた。

だというのに――

「はっふ……んふっ！ んっじゆる……ふちゆるう……むっふ……んふううっ……なん……だ……ふじゆうっ……なん……ら……これ……ちゅっろ……ふちゆるっ……んちゆるお……お……ふうっふうっふうっ……気持ち……んふうう！ きもひ……いい……」

気持ちがいい。男達にされていた時よりも強烈な愉悅を覚えてしまっている自分がいた。「これ……んちゆううっ……こりえ……はっふ……んふううっ……。なんか……なんか……ちゅろろ……ふちゆるお……きしゅ……されながら……身体……撫でられるの……凄く……ちゅぶうっ……しゅごく……感じりゅ……。なんれ……どう……して……こんな……んふうう……気持ち……いいんだあ？」

手の動きに、舌の蠢きに合わせて全身をゾクゾクとした感覚が襲ってくる。身体中が蕩けてしまいそうなほどの心地よさに、うっとり瞳を細め、歡喜の吐息を響かせた。

「んふふ……ちゅっふ……ふちゆうう……ふうっふうう……んふうう……。簡単なことよ伊吹さん。私は女……。貴女と同じ女なの。だからね、どこをどう弄れば感じるかくらい簡単に分かるのよ。男なんかじゃ絶対に味わえないくらいの快感を刻んであげる。例えばほら、ここなんてどうかしら？ 気持ちいいでしょう？」

悶える姿を嬉しそうに見つめつつ、より淫靡に黎は手を蠢かしてくる。指先を股間部に添えてきたかと思うと、グジュッグジュッグジュッと断続的に秘部に押し込んできた。そ

の上でグリグリと膣口を抉るように刺激してくる。更には下着越しにクリトリスを摘まんできたかと思うと、それを転がすように刺激してくるなんて真似まで……。

「あんんっ！ はっふ……あっ！ それ……んっんっ……それ……す……くふう！ 凄
い！ あああ……すっごい！ くっひ！ はひんんっ！ こんな……こんなの……んっち
ゅ……はちゅう……信じ……はあ……はあ……はあ……信じられない。こんなに……こ
んなに気持ちよく……なっち、まうなんてえ！」

秘部に水の冷たさを感じる。だが、冷たいはずなのに、水の中の秘部は燃え上がりそう
なほどに熱く火照り始めていた。水着の中で秘裂がくぱつと左右に開いていく。当然のよ
うに愛液も溢れ出す。膨れ上がる熱気の後押しされるように、白い肌が桃色に染まった。
肌には水滴だけではなく汗が浮かび上がる。

「ふふ、貴女のここ……水の中でも分かるくらいグチヨグチヨになってるわ。これ、もし
かしてもうイキそうになってる？ ちょっと弄られただけでイッちやいそうになつて
る？」

秘部を淫猥に弄り回してくる。水とは違うねつとりとした愛液を搦め捕るように、黎は
指をくねらせてきた。

「それは……それはあああ！」

膨れ上がってくる。絶頂感としかいえない感覚が。一度味わっているからこそ、それを理解することができない。けれど、簡単に認めるわけにはいかない。唇を必死に引き結び、漏れ出そうとする嬌声をなんとか抑え込もうとした。

「我慢する必要なんかいいわよ。素直になつて。大丈夫、恥ずかしがることなんかにもないから。ほら、見てみなさい。周りを……」

「まわ……り……」

喘ぎながら、刻まれる肉悦に全身を打ち震わせながら、言われるがままに周囲を見回す。すると、周りでも自分達と同じような状況にある女達が何人もいた。

「ああ……お姉様……そこ……んん！　そこいいです♥」

「んふうう！　やっぱり……気持ちいい。貴女とこうして抱き合いながらあそこ……弄りあうの……すつごく気持ちいいわ」

「我慢できない。たえ……られない……。イック！　私……はあああ……イッチャウ。イッチャいますうう♥」

抱き合い、互いの身体を愛撫し合い、ひたすら身悶える。ここがプールという公共の場だということもまるで気にしない。ただひたすら本能のままにとった様子で女達は喘ぎに喘いでいた。

「ほら、皆凄く気持ちよさそうでしょ？」

「ああ……気持ち……くううっ……良さそう」

頭がボーッとしているせいだろうか？ 黎の言葉がストレートに頭の中に染み込んでくる。素直にコクッと頷いた。

「ここは皆が素直になれる場所。隠すことなく気持ちよくなれる場所なのよ。だから遠慮しないで。素直になって。イキたいでしょ？ 私におまんこ弄られて……沢山気持ちよくなりたいでしょ？」

耳元で言葉を重ねてくる。吐息と共に届く囁き。黎の言葉に脳髓が満たされていく。確かにそうだ。我慢する必要なんか欠片もない——そうした思いが抑えがたいほどに膨れ上がってきた。

「もう一度聞かろうよ。イキそうなんでしょ？ イキたいんしょ？」

再び尋ねられた。

その言葉に——

「い……イキたい。んんんっ！ はっふ……くふううっ！ こんな……我慢できない。だから……あっあっ……だからイキたい。いか……せて……んんんっ！ ほ……欲しい」

頷いてしまう。素直に欲望を口に出してしまう自分がいた。

「いいわ。沢山……んふふ……沢山イカせてあげる」

伊吹の返事に黎は満足そうな表情を浮かべる。それと共に改めて手を蠢かせてきた。秘裂をなぞり上げてくる。クリトリスを転がすように刺激してくる。その上で水着をずらしてきたかと思うと、グジュリツと膣口に指先を挿入までしてきた。

「あつは……これ……中……んんん！ 膣中につ！」

膣道が押し広げられる。自分の身体の膣中に異物が侵入してくる感覚に、一瞬全身を戦慄させた。ただ指を一本——しかも先端を少しだけ挿入れただけでしかない。けれど、圧迫感のようなものを感じてしまう。息さえ詰まるほどだった。

だが、苦しさなどはない。それどころか寧ろ——

「なんだ？ これ……なんだ？ 嘘……ふうう！ 嘘だろ!? いい！ あんん！ はっふ……くふうう！ 膣中……んくうう！ 膣中に指挿入られるの……すつごく！ ふうっふうっふうっ……すつごく……いい！ 気持ち……あんん！ 気持ちいいのが……どんどん……これ……どんどん大きくなって……くうう！」

性感が増幅する。これまで全身を駆け抜けていた快感の上に、更に強烈な快感が重なってくるような感覚だった。

「はふうう！ 抑え……んんんっ！ 抑えられない！ 気持ちよすぎる！ マジで……黎

さん……ふうっふうっふうっ……こんなの……こんなの気持ちよすぎて……お……れ……マジで……イクっ！ いっち……まううっ！」

流れ込んでくる。開いてしまった膣口の中に冷たい水が。すると何故かそれだけでより肉悦は大きなものに変わってしまう。頭の中、思考が水の冷たさによって書き換えられていくような異様な感覚だった。それが心地いい。自然と眉間に皺が寄る。瞳は今にも泣き出しそうなほどに潤んでいった。唇は半開き状態で閉じることができない。指の動きに合わせて幾度となく熱感混じりの吐息を伊吹は「はあっはあっはあっ」と響かせた。

「いいわよ。イッて。見せて。貴女がイク姿を……」

「ああ……ああっ！ イクッ！ マジでイクッ！ イック……から、だから……もう一度……もう一度……キスううっ！」

わき上がってくる絶頂感に後押しされるように、ほとんど無意識の内に再びの口付けを伊吹は黎に懇願した。

「ええ、もちろん」

想いに女は応えてくれる。そうすることが当然だともいうように、クチュッと伊吹の口唇に自身の口唇を重ねてくれた。もちろん舌だって挿し込んでくる。グチュグチュという音色が響いてしまうほどの勢いで、改めて口内をかき混ぜてきた。

「んっふ……むじゆるっ！ ふっちゅ……んちゅううっ！」

（これ……これ……マジで……まっじですげえ！ あそこ……指でジュボジュボされながら……口の中までなんて……。オレの全部がこの人に……。滅茶苦茶にされてる……み……たいだ。ああ……いい！ これ……いい！ よくて……よすぎて……もう！）

膨れ上がる絶頂感。濁流だぐりゅうのように流れ込んでくる快感に後押しされるように、自分から強く黎の身体を抱き締めた。その瞬間、黎の指がグジュツと強くクリトリスを押し潰してきた。

「ふひいい！ それ……い……イクっ！ イック！ いいっ！ いひいい！ これ……良すぎるう！ あああ……よ、すぎて……イック！ イクイク——はあああ！ 抑えら、れ……ない！ 気持ち……んふうう！ あそこ……気持ちよす……ぎて……イック！ イクうううっ！」

性感が爆発する。目の前が真っ白に染まった。思考さえも吹き飛びそうなほどの心地よさというべきだろうか？ プールでの性行為という異常な状況だというのに、幸福感さえ覚えてしまう。

「あああ……んああああ！ あっあっあっ——はあああああ！」

そんな想いを伝えるように、強く強く黎の身体を抱き締めながら、伊吹は肉悦に打ち震

二人の視線が伊吹へと向けられる。ムワツとした発情臭を分泌させる肢体を、女達が舐め回すような視線で見つめてきた。その目付きはサカった男と何ら変わらない。それほどまでに本能に塗れたものだった。

(これ……おかしい……何か……変だ)

明らかに異常な状況だ。何かが起こっているとしか思えない。

けれど、では実際何が起きているのかと考えることはできなかった。

身体に伝わってくる水の冷たさを感じていると、何故か身体が熱くなってしまう。冷たいはずなのに、熱い。頭がクラクラしてしまう。

(駄目だ。身体……熱くなる。もつと……もつと気持ちよくなりたいって……おもつち……まう。それしか……考えられなくなつち……まう)

水の冷たさと女達の視線を感じていると、達したばかりの肉体が再び疼き始めた。快感を刻んで欲しい。もつともつと気持ちよくなりたい——そんなことを考えてしまう。

「して欲しいでしょ？」

するとそんな想いを讀んだかのように、改めて黎が尋ねてきた。

「あああ……ほ……欲しい。して……欲しい。もつと……オレを……もつと……はああ……気持ち……よく……」

その問いに対して伊吹にできることは、ただただ欲望のままに頷くことだけだった。

*

ちゅっろ……れちゅろっ……ふっちゅ……んちゅう……。

プール内に淫靡な音色が響く。二人の女達が伊吹の身体を舐め回す音色だった。

水から上がったプールサイド——そこに敷かれたマットの上に寝かされた状態で、ただただ伊吹は女達に嬲られていた。

ずらされた水着——あそこ片胸が剥き出しである。露わになった片方の乳首に一人の女が唇を押し当て、赤子のように吸っていた。もう片方の胸にも女が唇を密着させてきている。水着の上からジュルジュルと乳首を吸っていた。さらけ出された秘部には、やはり剥き出しになった黎の秘部が押し当てられている。

ぐっちゅぐっちゅぐっちゅぐっちゅぐっちゅ……。

黎はまるで女を犯す男のような勢いで腰を振っていた。秘部が秘部で擦り上げられる。まるであそこあそこで口付けているかのような状況だった。

「はひいいい！ いっひい！ あああ！ あんっあんっ……あんっ！ これ……抑えられない！ 気持ち……んふうう！ きもちよ……すぎて……でっる！ 声……変な声……でちまううう！ 抑え……あああ！ 抑えられない！」

女達の舌が蠢くたび、黎の腰が振られるたび、どうしようもないほどの肉悦を覚えてしまう。その愉悅に後押しされるように、水の中で刻まれた以上の絶頂感が膨れ上がってきた。

「すつごい！ あんん！ あつは……んはあああ！ これ……すつごい！ よすぎる。んひいひい！ よ……すぎて……感じすぎて……また……簡単に……またああ！」

「イクの？ んふうう！ イッチャウの？」

「ああ……ああつ！ イクつ！ いっち……まううう！」

否定なんかできない。否定しようとも思わない。刻まれる愉悅のまま、素直に何度も首を縦に振った。

「いいわよ。今度は私も……あんん！ 私もいくわ！ だから……あつあつあつ……だから……一緒……んふうう！ 伊吹さん……一緒にイキましょう。その為に貴女も……んふうう！ 貴女も腰を振って」

黎がおねだりするような言葉と視線を向けてくる。

「あああ……一緒！ 一緒！ んふうう！ 一緒にいい！」

一緒にイク——それはとても素晴らしいことのような気がした。だから伊吹も腰を振り始める。黎の動きに合わせて、乳房を舐められながらも自分から強く秘部に秘部を押しつけ

た。クリトリスとクリトリスでキスをする。

「はああ！ やっぱい！ マジやばいっ！」

途端に肉悦が増した。強烈すぎる性感に、だらしなさを感じさせるくらいに表情も歪んでしまう。開いたままの口端からは唾液が零れ落ちた。

「伊吹さん気持ちよさそう……あたし達も……んんん！ あたし達もお！」

そんな姿に乳房を舐る女達も興奮したような様子で嬌声を響かせ始める。伊吹を責めつつ、自慰をしているらしい。

四人の女の喘ぎ声がシンクロし、プール中に響き渡る。

「んっちゅ……ふちゅっ！ はちゅうう！」

周囲でこの光景を見ていた一人の女にキスをされた。

「あ、ずるい……私も……んっちゅ……はちゅうう」

すると入れ替わるように新たな女が口付けしてくる。

「ふんん！ あっふあ……んっちゅ……ふちゅう……ちゅっちゅっちゅっ……んちゅるるるう……むっふ……んふううう」

口の中をグチュグチュとかき混ぜられた。それが堪らなく心地いい。頭の中まで蕩けそうなほどの愉悦が舌の動きに合わせて刻み込まれる。

「はあああ……感じてる貴女……美味しそう」

そうした姿に興奮したような表情を浮かべた別の女が近づいてきた。伊吹の手を取り、指を咥え、しゃぶってくる。まるでペニスにフェラチオでもするかのよう——

「むっちゅ……ちゅぼっ！ んっちゅぼ……ちゅぼっちゅぼっちゅぼっ」

指を何度も何度も口腔で擦り上げてきた。

そんな行為にさえも愉悅を覚え、肉体をヒクつかせてしまう。

「可愛い。もつと感じてちょうだい」

肉悦に打ち震えていると、乳房を責める女達が妖艶な微笑みを向けてきた。ジュールジュルとこれまでよりも強く乳首を吸ってくる。水着に浮かび上がるほど勃起してしまった乳首を転がすように舌先で愛撫したりもしてきた。

「あんん！ いいっ！ これ……マジでいい！ こんなの本当にイクッ！ ま……じでイク！ だから……だからああ！ 皆……んふうう！ 皆で……皆で一緒にいいい！」

「ええ、イキましよう……さあ……んっんっ！ んんんんっ！」

これまで以上に強く黎の腰が押しつけられた。ジュールルルッと強く両乳首が吸い立てられる。

瞬間——

「ああつ！ イック！ イクつ！ イクイクイク——オレ……イクううう！」

絶頂感が爆発した。腰と腰を強く押し付け合いながら、全身を激しく痙攣けいれんさせる。背筋を反らして下腹を突き出すような体勢を取りながら、歓喜の悲鳴を響かせた。

「わた……しも……あああ……私もイクつ！ あつは……イクわ！ イクつ！ 伊吹さんと一緒に……んんん！ イクううう♥」

同時に黎も達する。

いや、黎だけじゃない。

「ああああ……すつごい！ んんん！ 凄いわ！ あああ……あたしも……あたしもおとおつ」

「んんん！ いいつ！ いいつ！ いひいいいいつ!!」

他の二人も同じように快樂の頂に至った。

四人で歓喜する。

「はあああ……溶ける。溶けちまいそうだ。すげえ……いい……んふうう！ よくて……よしゆぎて……あああ……これ……出る。でりゆ……んひいい……で……ちまううう！ あつあつあつ……んはああああ……」

強烈な脱力感に包み込まれる。身体中から力が抜けた。



そのせいだろうか？ 膀胱が開いてしまう。結果、女達と身体を重ね合わせたまま——
じよっぽ！ じよぼろろろ！ じよろっじよろっ……じよろろろお……。

「んひいい！ 漏らし……オレ……しようべん……もら……しち……まって……るうう！
あつは……んはあああ！」

失禁までしてしまうこととなつてしまった。

黄金水をぶちまける。人としてあまりにも恥ずかしすぎる状況だった。

「こんなの……こん……なの……最低……さい……あくだああ！ でも……んひいい！
でも……いひっ！ これ……しよん……べん……まつで……気持ちいい！ 漏らしてる
のに……感じる！ 感じち……まうう！ あつあつあつ……んはあああ！」

だが、気持ちがいい。堪らないほどに心地いい。

（なんでだよ？ 漏らすなんて……最悪だ。こんなことあっちゃ……いけ、ねえのに、ど
うしてこんなまで……気持ちいいんだ！ いやだ。いや、なのにいいっ！）

尿を漏らす羞恥や解放感さえも性感として受け取ってしまう。排尿を続けながら、ただ
ただ伊吹は歓喜するのだった。

「はふうう……はあ……はあ……あはああああ……」

やがて絶頂感が引いていく。心地よい気怠さを感じながら、幾度も伊吹は肩で息をした。

スーツ越しに熱汁が肌に染み込んでくるような感覚が走る。

(んひいいい！ 気持ち……あああ……気持ち……いい！ 全部……ぜん……ぶが……あううう！ せい……えきの……なかに……沈んでく……みたいだああ！ こんな最低……さい……あく……すぎる……なのに……なのにいい！)

溺れてしまうのではないかとさえ思えるほどに口内は大量の白濁液で満たされている。正直苦しい。このまま呼吸できずに本当に死んでしまうのではないかとさえ思えるほどだ。それなのに、その苦しみにさえも心地よさを感じてしまう。抗うことなどできない。

(これが……女の快感……。これが……薬の……力？ 薬……凄すぎる……こんなっ！我慢なんて……絶対……ふひいいい！ 絶対……無理い！ イック！ イクっ！ 口に……全身に……はあああ！ せーえき……ふひいいい！ せーえきぶち……まけられて……オレも……オレも……オレもおおおお！)

耐えねばという思いさえも蕩ける快感。そんなものに後押しされるように――

「いっぶ！ んひいいい！ いぶううっ！ おっおっおっ――おんんん!!」

伊吹も絶頂に至る。

ビクビクと打ち震える男達のペニスにシンク口するように、口には多量の白濁液を溜め

たまま全身を痙攣させ、歓喜の悲鳴を響かせた。

「ああおお！ おっおっ……おふううう……」

（なんで……こんな……あああ……止まらない……気持ちいい……の……が……とまら……
…なひいい！）

終わらない快感。抗えない愉悦。今の伊吹にできることは、ただひたすら愉悦に打ち震え続けることだけだった。

「ふふふ、イッたみたいだね。どう？ 僕達が作った薬は最高だろう？」

真釘が楽しそうな表情を浮かべながら囁くように問いかけてくる。

「お……おふううう……」

そんな彼の言葉に対し、ほとんど無意識の内に伊吹は首を縦に振った。

「いい返事だ。それじゃあ……飲んでくれよ水城。今、僕が注ぎ込んだものを飲むんだ。そうすれば……もつと気持ちよくなれるからさ」

「も……もつろ……」

飲む。これを飲めばもつと……。

（駄目だ。流されちゃ……駄目だ……）

まだ理性は残っている。当然制止の言葉を向けてきた。だが、止まれない。もつと気持ち

ちよく——その言葉に期待のような感情を抱いてしまう。

だから——

「んっぎゅ……ごきゅっ！　ごきゅっごきゅっごきゅううっ」

本能のままに喉を上下させ、注ぎ込まれた白濁液を嘔下した。

「んげっほ！　げほおっ！　げほっげほっ……げほおおおっ！」

濃厚すぎる牡汁が喉に引つかかる。結果、幾度も嘔吐えずくこととなってしまった。そのせいで白濁液が逆流し、鼻腔から鼻水のようにブビュッと出てしまう。余りに不様すぎる姿だ。けれど、それでも止まらない。喉奥に白濁液を流し込み続ける。

（広がる……これ……生温かいのが……腹に……広がって……るのが……分かる……。わかつち……まうううっ！　あああ……気持ちわりい……。キモ……すぎるうう！　でも……

……なんでだ？　どうしてだ？　この……気持ち悪さも……気持ち……よくてえ！）

胃の中に広がる白濁液の熱気。まるで自分のすべてが精液で満たされているような感覚だった。そんな感覚に心地よさを感じてしまう。昂りを覚えてしまう。だからだろうか？　飲んだだけ。そう、ただ精液を飲んだだけでしかないというのに——

「い……いっぶ！　まら……まらいぶっ！　おおお！　オレ……おつりえ……まら……まらあああ！　んっひ！　ふひっ！　くひいいいっ！」

再びの絶頂に伊吹は至ってしまうのだった。

強烈な快感に意識さえ飛びそうになってしまう。

「いい姿だ。だが、まだまだぞ。もつとだ。もつと強い快感を刻んでやる」

しかし、気絶する暇すら男達は与えてはくれなかった。

*

「はっひ！ ふひい！ これ……胸！ あああ！ 胸にも……む、ねにも……流れ……流れ込んでくる！ あああ……葉！ 葉がああ！」

スーツの上から乳房にも注射器の針が突き立てられた。もちろんただ刺してくるだけではない。当然のように再び葉を流し込んでくる。

「熱い！ これ……あつは……んはああ！ あ、つい！ 胸！ お、れの……んひん！ 胸が……む、ねが……あじゅいい」

途端に乳房が燃え上がりそうなくらいに熱く火照り始めた。ジンジンという疼きまで広がり始める。そうした熱気と疼きに後押しされるように、乳首がより勃起してしまう。屹立する乳頭、スーツにはつきりと乳首の形が浮かび上がった。身体に密着するスーツの胸元が張り詰めていくような気さえする。それがあまりにも心地いい。乳房が更に大きく膨らんでいくかのような感覚だった。スーツを身に着けているはずなのに、あまりにも胸の

形がはつきり浮き出すぎているせいで、胸をさらけ出してしまっているかのような気分になさえなってしまう。

「なかなか可愛い乳首だ」

そんな胸に男達がペニスを寄せてくる。三日月と大場の二人が乳頭に肉先を密着させてきた。まるで胸を犯そうとしているかのように、グリグリと膨れ上がった亀頭を押しつけてくる。肉棒の熱気が胸に伝わってきた。

「はんん！ あああ……んっは……これ……こんな……う、そだ……ふひい！ 嘘だろお！ あおお……んおおお！ い、いいっ！ 気持ち……き、もち……いひいっ!!」

打ち込まれた薬の効果のせいだろうか？ ペニスのゴツゴツとした感触や熱さを感じるだけで、肉体は快感を覚えてしまう。自然と口が開き、甘い悲鳴を漏らしてしまった。

「いいだろ？ 最高の気分だろう？」

悶え狂う姿に男達が勝ち誇るような表情と言葉を向けてくる。

「ふ……ふざ……んんん！ ふ、ざ……けるな！ こんな……んふうう！ こ、んな……ことであつ！」

感じているのは事実だ。間違いなく肉体が性感を覚えてしまっている。だが、伊吹には矜持がある。男達の言葉を認めず、必死に愉悦を否定した。いや、その言葉は男達だけに

向けたものではない。自分自身に対する言葉でもあった。

「そうか、まだ足りないか。だったらもつと気持ちよくしてやるよ」

しかし、抵抗は更なる責めを生む結果しかもたらさない。

真釘は本当に楽しそうな笑みを口元に浮かべたかと思うと、どこからかローターのようなものを取り出すと、スーツの股間部にあるジッパーを開き、内部に挿入してきた。異物がグジュリッと秘部に密着してくる。

「はひんっ！」

無機物の冷たい感触が伝わってきた。反射的に全身をビクビクと打ち震わせる。

「てつめ、なにをっ!!」

「なに？ ふふふ、こういうことだよ」

疑問に対し真釘は一言口にしたかと思うと、リモコンのようなものを操作した。

「ヴィイイイイイッ！」

「はっひ！ くひいいいいっ!!」

途端に秘部に押しつけられたローターが振動を開始する。室内中に機械音を響かせながら、伊吹の敏感部を容赦なく刺激してきた。

「な……あんん！ なん、だ……はひい！ な、んだこ……これええ!? あああ……アソ

コ……んんん！ アソコが！ ふひひい！ あ、そこがああ！」

「アソコがどうした？ どうなってる？」

「どうって……これ……んひい！ こ、れ……溶ける！ と、けちまう！ オレの……んんん！ アソコが……ど、ドロドロになりゆう！ あんん！ んひんん！」

振動が性感に変わる。口にしてしまった言葉どおり、本当に身体中が蕩けてしまいそうなくらいの快感を伴った刺激だった。頭がおかしくなりそうになる。自分のすべてが蕩けていくような感覚とでもいうべきだろうか？

「気持ちいいだろ？ 最高に感じるだろ？」

「そ、そんな……んんん！ そ、んなこと……そんなことおお！ あっちゃ……ふひい！ あっちゃ、いけ……ねえ……いけねえのにいい！ これ……あああ……これええ！」

否定しなければならぬ場面だ。感じてなどいないと叫ばなければならぬ場面だ。だが、それを言葉にすることなどできない。何故ならば――

「いいっ！ あああ……なんでだ？ ど、うして……こんな……ああお！ こんなに気持ち……が、いいんだあ!!」

本当に気持ちよかったからだ。

刻まれる感覚は間違いなく性感だった。

否定しなければならぬという思いさえも蕩けてしまいそうなくらいの快感に全身が包み込まれる。

（なんでだよ？ 感じたくなんかねえ……のに……どうして、どうしてこんなに……駄目だ。耐えろ！ おさ、え……ろおお！）

必死に自分に言い聞かせる。

「ふつく……んくうう！ ふうつふうつ……んふうううつ」

なんとか口唇を閉じ、漏れ出そうになる嬌声を抑え込もうとする。

「我慢なんかさせないよ」

だが、抵抗は許されない。真釘が嬉しそうな表情を浮かべた。いや、ただ笑いかけてくるだけではない。手を伸ばしてきたかと思うと、スーツの上からではあるが指先をグジュリツと肛門に押しつけてきた。グリグリと尻の穴を掻き混ぜるように刺激してくる。

「おおおっ！ なっ!? それ……尻！ そ……こは尻だ！ 尻だぞお！」

肛門に圧迫感が加えられる。信じられなかった。尻なんてただの排泄器官でしかないはずなのに……。

「ああ、尻だな。でも、気持ちいいだろ？」

「気持ちいいって……あり得ないだろ！ 尻を弄くるなんてえ！」

「あり得ない？ お前、それでも男か？ 男だったら綺麗な女の尻だって弄くり回したいものだろ」

「それは……そ、れはあああ！」

確かにそのとおりだ。伊吹にだって気持ちちは分かる。女の尻であることを想像して自慰をしたことだって何度もある。だが、だからといって自分の尻を弄られる妄想など一度もしたことはなかった。

おぞましい。男に尻を弄くり回されるなんて……。吐き気すらわき上がってきた。

だが、感じるものは気持ち悪さだけではない。

「ほら、いいんだろ？ こうされるのもいいんだろ？」

笑いながらツプツとスーッとごと肛門に指先を挿入してくる。同時にヴイイイイッというローターの振動も更に大きなものに変えてきた。

「はひんん！ おおお！ これ！ こ、れえええ！」

途端に視界がグニヤリッと歪む。それと共に強烈な性感が身体の中に流れ込んできた。

「大きくなる！ 快感が……おお、きくうう！」

肥大化する愉悦。意思だけでは抑え込めるようなレベルではない。

身悶える。拘束された状態で肢体をくねらせる。

そんな伊吹により強い快感を刻もうとするかのように腸壁をなぞるような動きで真釘は指を蠢かせてきた。直腸を指で解そうとしているかのような動きだ。

「あああ……ケツ……んんん！ けつつ……いひいひい」

心地いい。どうしても肉悦を覚えてしまう。

「感じる姿……最高だぞ！」

「おおお！ もつと……もつと見せろ」

そうした姿に三日月と大場も興奮を大きなものに変えた。

三日月は更に強くペニスで胸をズジュツズジュツと擦り上げてくる。肉先から溢れ出す先走り汁がスーツに染み込んだ。

「こつち……俺はまたこつちだ！」

大場はというと、一度乳房から肉棒を離れた上で――

「おっぽ！ んぽおおおっ！」

再び伊吹の口内に肉槍を突き込んできた。もちろん、ただ挿入してくるだけではない。ピストンを開始してくる。まるで性玩具でも扱うかのような勢いで、ドジュツドジュツドジュツと繰り返して伊吹の喉奥を突いて突きまくってきた。

「がぼおお！ おっぽ！ んびよおおおお！」

叩かれる。喉奥が何度も何度も……。強烈な突き込みによつて、視界が幾度となくチカッチカッと明滅した。

(激しい。はげし……。すぎて……。これ……。死ぬ！ マジで……。死ぬうう！ でも……。ああ……。でも、なんでだ？ どう……。じでええ!! こつれ、こんな……。こんなことでも……。オレ……。オレ……。オレえええ！ 気持ち……。んひん！ き、もち……。よく……。おおお！ なっち……。ふひい！ なっちまってるう)

重なっていく。積み重なっていく。快感の上に快感が……。

ローターで刺激される秘部からはより多量の愛液が溢れ出し、スーツのクロッチ部が内側からグショグショに濡れた。肛門からも腸液が溢れ出し、押しつけられた真釘の指先をぐつちよりと濡らす。そうした下半身の変化に連動するかのようになり、肉棒で擦り上げられる乳房もどんどん熱を帯びていった。疼きもより大きなものに変わっていく。

「おつぷ！ んびよおお！ これ……。んぶうう！ こ……。れ……。くる……。ぶっぽ！ んぽおお！ き……。ちまう……。また……。ま……。らあああ」

熱くなつていく身体。強烈な火照りは全身が燃え上がりそうなほどだ。そうした熱気に後押しされるように、再び膨れ上がってくる。理性では抑え込むことなどできそうにないほど強烈な絶頂感が……。

「イキそうか？ いいぞ。イクならイケ！ 不様な姿を見せるんだ！」

「んぶうう！ い、やら……しよんなの……いや……んぶうう！ い、や……なのがいい！
なんでだ？ どうじで……おれ……にやんでええ!!」

自分の意思を自分の肉体が裏切っているかのような感覚だった。

絶頂感が津波のように押し寄せてくる。抗おうという理性など、大波の前の小舟でしかなかった。

「い……イグツ！ まじで……オレ……ま、じれええ！」

「イケ！ さあ、イケええっ！」

絶頂感を後押しするかのようには、ジユズブツと真釘が中指の中程までをスーツごと肛門に挿入してきた。

同時に大場が腰を突き出してくる。肉棒の先端部を、ドジュボツと食道に届くほど奥にまで……。更には三日月も肉棒をより強く乳房に押し込んできた。胸に龟头がめり込んでくる。

「おおお！ おっぼ！ ぶぼおおおっ!!」

瞳孔が開きそうなほどに瞳を見開く。

瞬間、突き付けられた二本の肉棒から、多量の白濁液が溢れ出した。

胸に、喉奥に、熱汁が注ぎ込まれる。黒いスーツが白濁に塗れ、口内が再び牡汁で満たされた。

「がぼおおおお！」

(でつて……射精てる！ 熱いのが……くせーのが……でつて、るううう！ おおお！ い、やだ……こんなの……イヤだああ！ なのに……な、のに……なん、でだ？ どう……じでええ!? いい！ これ……いひいい！ 良くて……射精よ……すぎて！ い……イクっ！ イクっ！ イクイク——いつち……まううっ!!)

身体に染み込んでくる熱気が性感に変わる。思考さえもドロドロになりそうなほどの肉悦。逆らえない。ただただ気持ちがいい。

「あつぽ！ んん！ おっおっおっ——んおおおおっ!!」

快感に包み込まれながら、伊吹は再びの絶頂に至った。

「おおお！ んおおおおお！」

(いい。すげえ……いい！ これ……溶ける。とけ……ちまうう……。身体から……ちか、らが……抜けて……んんん！ あ、なんか……出る！ で、ちまうう)

強烈な性感によって全身から力が抜けていく。そのせいで膀胱がクパッと口を開けるととなってしまう。



膣中や口腔でビクビクと震えるペニスにシンクロするように全身を小刻みに震わせながら、出雲の目の前で快楽の頂に至った。

「あぼおお！ いっひっ！ いひいっ♥」

グルンツと瞳は半分白眼を剥く。結合部からは——
ぶっじよ！ じよぼろっ！ じよろろろろろおおっ！

小便さえ溢れ出した。

「ふひい！ おも……らじ！ おおお！ おもらじも……いっひ！ いひい♥」

不様すぎる失禁姿。けれど、それさえも心地いらしい。本当に気持ちがよさそうに伊吹は喘ぐ。その有様は快楽に墮ちた牝としかいいようがないものだった。

そんな伊吹から射精を終えて満足した男達が肉棒を引き抜く。途端にプシュウウツとこれまで肉槍を突き立てられていた秘部から多量の精液が噴水のように溢れ出した。

「おええっ！ うえええええっ!!」

そのまま伊吹は腰だけを突き上げた状態で上半身を床にぐったりと横にする。それと共に口を開いたかと思うと、口内に注ぎ込まれた白濁液を吐き出した。床に精液の水溜まりのようなものができる。

「おいおい、なに吐き出してらんだよ。折角俺達が射精してやったんだぞ。しっかり飲め。」

零した分は舐め取れよ」

すると男達が伊吹に命令を下した。

一方的に命令されるがままに動く——本来の伊吹であればあり得ないことである。だが、逆らわない。抗う気力さえも残っていないのか、相棒は命じられるがままに床に広がった白濁液に自分から舌を伸ばした。

「んっちゅ……ちゅれろっ……んれろおおっ……」

白濁液を舐め取る。舌で搦め捕る。それだけじゃない。床だということも気にすることなく唇を強く押しつけると、ジュルルルッと下品な音色を響かせて白濁液を啜ったりもした。そのまま喉を上下させて嚥下まで始める。

「んごつきゅ……ごきゅっごきゅっ……んげっほ……げほっげほっほおおっ……おっえ……うえええ」

余程不味いのか？ 余程濃くて喉に引っかかるのか、幾度となく伊吹は咳き込んだ。しかし、それでも精飲をやめはしない。濃厚牡汁を啜り続ける。

「んっふ……はふうっ……ふうっふうっ……んふううっ……んっえ……けぷう」

やがてすべてを飲み干し、精液臭そうな吐息を伊吹は漏らした。

「全部飲んだな。なら、ごちそうさまといえ。美味しい精液を飲ませてくれてありがとう

「ごぞいますといえ」

そんな伊吹に対して男達は更に命じる。

そのような命令に本来の伊吹なら絶対に従うことはないだろう。だが、伊吹は逆らうこととなく――

「あつふ……んふううつ……。ご、ごひほうしゃま……。れひた。けつぷ……。うふううつ……おいひいせーえき……。のましてくれて……。はあ……。はあ……。はあ……。あ、ありがとう……。……ごじやいました」

素直に従う。しかも、ただ口にするだけじゃない。その顔は、絶対的強者に媚びる牝の顔としかいえないようなものだった。

確かに伊吹の姿形は女にしか見えないものになっている。男で会った時の姿を知っている出雲でさえも正直興奮を覚えてしまうほどの女に。けれど、性格は男の頃のままだった。そこだけはなにも変わっていないはずだった。

しかし、そんな伊吹が媚びている。男達に……。

女だ。本当に伊吹は女に変わっていた。それだけのことをされたのだろう。一体どれだけの陵辱を受けたのだろうか？

(あ、これ……。ヤバイ……)

それを意識してしまつた瞬間、頭では伊吹だと分かっているのに、全身が、特に下半身が燃え上がりそうなほどに熱く火照り始めるのを感じた。ズボンの下で肉棒が硬く、熱くたぎり始める。

「ふふふ、お前も男だな」

大和がそれに気付いた。

「だ、黙れっ！」

「恥ずかしがる必要はない。あんなものを見たら興奮するのは当然だ。だから、そうだな。お前をスッキリさせてやろう。父親からのプレゼントだ」

「貴様……何を考えて……」

「簡単なことだ。水城……お前、こいつをスッキリさせてやれ。相棒の興奮を鎮めてやるんだよ」

問いかけに答えるように、大和はぐったりとしている伊吹に命じた。

*

（スッキリさせる？ オレが……出雲を？）

何をスッキリさせろというのだろうか？ 正直言葉の意味があまり理解できなかった。何故ならば、出雲が興奮する姿など想像もできなかつたからだ。いつも涼しい顔をしている

相棒。若いくせに性欲が枯れてしまっているのではないかとさえ出雲に対しては思ったことがあるくらいだ。鎮めるものなんてなにもないだろ——という感情さえ抱く。

だが、それでも一応確認の為に椅子に拘束されている出雲を見ると——

(あ……あれ……大きくなってる)

彼の股間部が膨れ上がっているのが分かった。ズボンの上からでもハッキリと分かる。間違いなく出雲は勃起していた。

(オレを見て……興奮したのか？ あんなに大きくするくらい……オレで……)

思わずゴクツと息を呑む。

それと共にドキドキと胸が高鳴り始めるのを感じた。

(なんだこれ？ オレ……男だぞ。男のはずなのに……。第一、出雲は相棒だぞ。でも……
……だけど、今のオレは……)

女だ。どうしようもないほどに……。

それを散々刻み込まれてしまった。教え込まれてしまった。肉体は覚えてしまっている。ペニスで犯される快感を……。膣に肉棒を挿入される気持ちよさを……。

味わってみたい。出雲の屹立の味も感じてみたい。相棒の肉槍は一体どれほどの快感を自分に刻み込んでくれるだろう？ 欲望が抑えがたいほどに膨れ上がってくるのを感じた。

(だ、駄目だ……それは……駄目だ……)

が、まだ理性は完全に消えてはいなかった。残った思考力で自分を必死に引き留める。

「やるんだ水城。やらなければ出雲を殺すぞ。相棒を死なせたくはないだろう？」

するとそんな伊吹の心を読んだかのように、脅しの言葉を大和が向けてきた。

裏切り者の言葉だ。立場を利用して犯罪を行っていたようなクズ。息子さえも裏切って

いた最低な人間の命令だ。本来ならば従うなど絶対であり得ない。だが――

(やらないと出雲が死ぬ？ それは……それは駄目だ。相棒を死なせるなんて駄目だ。だ、

だから……)

「はあ……はあ……はあ……」

大和の言葉に心の何処かで免罪符を得たと喜ぶような感情を覚えてしまう自分がいた。

膨れ上がる欲望に後押しされるように、肉悦でぐったりとした肉体をゆっくり起こすと、

拘束されている出雲へと近づいた。

「お、おい……。伊吹。駄目だ。こんな奴に従っちゃ駄目だ！」

出雲が制止の言葉を向けてくる。

「言いたいことも分かる。でも、駄目だ。お前を死なせるわけにはいかねえ。だから……

だから……」

死なせないため。出雲を守るため。それ以上でも以下でもない。これはしなければならぬことだから——言い訳のように心の中で繰り返しながら、捲れたスーツから乳房を零した状態で自ら出雲のズボンに手を伸ばすと、ジッパを下ろし、下着をずらした。

結果、相棒の肉棒がビヨーンと跳ね上がるように露わになった。

膨れ上がった亀頭。血管が浮かび上がる肉茎——逞しい肉槍が視界に映り込む。

「これが……」

ムワツとした男の匂いが鼻腔をくすぐってきた。

かつては自分自身も分泌させていた牡の発情臭だ。嗅ぎ慣れた匂いといっても過言ではないだろう。だというのにこの匂いを感じていると、それだけでより肉体が熱く火照るのを感じた。

何だか酷く喉が渇く。ジンジンと秘部が疼いた。

「これは……お前を助けるため……なんだからな」

そうした肉体の昂りを感じつつ、出雲だけではなく自分自身にも言い聞かせるように一言呟くと——

「んっちゅ……ふちゅうっ」

相棒のペニスに口付けをした。

「くあつ！　だ、駄目だつ！」

瞬間、出雲がペニスだけではなく全身をビクビクと震わせた。

「すげえ反応……気持ちいいのか？　こうか？　これが……いいのか？　ちゅうつ！　ふちゅう……ちゅうちゅうちゅう……んちゅうつ」

肉棒に口付けをする。以前だったら考えもしなかったことだ。だというのに自然と、より濃厚な口付けを肉棒に対して行ってしまう。

欲しい。欲しい。これが欲しい。これで感じたい。出雲の、相棒の肉棒で犯される快感を味わいたい——心の中で本能が叫び声を上げる。そんなものに後押しされるように、繰り返し亀頭に口付けを行った。その上で舌を伸ばす。肉棒に舌を這わせると、ねつとりと舐るように舐め回した。もちろん舐めるだけでは終わらない。先程無理矢理男達にされたように口を開き——

「おつも……もぼつ！　んぼおおつ！」

一気に根元まで肉槍を咥え込んだ。

（あああ……くっせえ。出雲の匂いが口の中に広がる。男くせえ。こんな……き、気持ち悪すぎる。相棒の……ふううう……相棒のちんぼ咥えるとかマジ……ありえねえだろ。ああ、でも、これは必要なことだから……。それに……なんだ？　ただ臭くて気持ち……

わりいだけじゃねえ。なんか……これ……なんか……)

口の中に肉棒を感じる——するとそれだけでこれまで刻み込まれてきた快感を思い出してしまおう自分がいた。啞えているだけだというのに、心地よさにも似た感覚を抱いてしまおう。そのせいかより肉体は熱く火照り、秘部からは多量の愛液が溢れ出した。

「ふっじゅ……んじゅうつ……ふっじゅぽ！ んじゅっぽおお」

膨れ上がるそうした昂ぶりに後押しされるように、口唇でキュツと肉茎を挟み込むと、ゆつくりと頭を上下に振り始めた。口腔全体を使って肉棒を扱く。いや、ただ扱くだけじゃない。射精してくれと訴えるように——

「んっじゅるる！ ちゅっず……ふじゅるるるるう」

頬を窄めて肉槍を吸った。精液を無理矢理吸い出そうとする。

「うっく駄目だ……。伊吹……や、めろ……」

するとすぐさま出雲は悶え始めた。普段のあまり感情を見せない表情からは想像もできないくらいに顔を歪ませる。眉間に皺を寄せながら、嬌声としかいえない声を出雲は漏らした。

(これ、感じてる？ 出雲が感じてる。オレで……気持ちよくなってるのか？ 射精しそ
うになってるのか？ オレで出雲が……)



相棒に性感を刻む。本来ならばあり得ない事態だ。夢でも見ているのではないかとさえ思ってしまう。けれど、間違いなくこれは現実だった。本当に気持ちよさそうに出雲が悶えている。射精したいと訴えるように、口淫に合わせてどんどん肉棒を膨れ上がらせてきた。

(なんか……これ……こんな姿を見てたら……)

倒錯した感情が膨れ上がってくる。

もつと感じさせたい。もつと出雲に快感を刻み込みたい——そうした想いがわき上がってきた。

「んっふ……はふううっ……ちゅぽんっ……はあっはあっはあっ……」

だから、一度肉棒を口から離す。龟头と唇の間に唾液の糸が何本も伸びた。

「わ、分かってくれたか？」

少しだけ出雲はホッとするような表情を浮かべる。

「すまねえ」

だが、そんな相棒に対して伊吹が発した言葉は謝罪だった。それと共に一度身を起こすと、今度は椅子に座る出雲に跨がるような姿勢を取った。その上で自分の唾液と溢れ出した先走り汁に塗れた肉茎に手を添え、先端部の位置を調整した。

「なっ！ 伊吹……お前、まさか……」

流石に察しがいい。伊吹が何をしようとしているかということに出雲が気付く。

「分かってるのか？ 僕達は男同士で……」

「ああ……そうだ。そうだな。オレ達は男だ。でも……それは前の話だ。…オレはもう……ふううっ……女……女なんだ。抑えられねえんだ。あそこが……まんこがジンジンするのを。だから、すまねえ」

欲しい。肉棒が欲しい——身体が悲鳴を発している。

男のものよりも遙かに強い快感を覚えることができる女の肉体。その欲望に抗うことなく、本来の女ではない伊吹には不可能だった。

「それに……これはお前を助ける為でもあるんだ。だから、仕方ねえ。こうするしかねえんだ。出雲……いくぞ」

クパアッとより肉花卉が淫らに花を咲かせていく。襲の一枚一枚が早く挿入して欲しいと訴えるように蠢いた。顔にもお前が欲しいというような表情を浮かべる。まさに牝としかいえない顔を……。目の前の出雲も、拒絶の言葉を口にはしているものの、快感を欲するような顔を浮かべていた。わき上がる欲望に抗うことなどできはしない。牡に媚びるような表情を浮かべながら——

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!

【偶数月】
隔月発売
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



二次元
**ドリーム
マガジン**
3D DREAM MAGAZINE

COMIC
UN コミック
アンソリアル

**敗北乙女
エクスタシー**
敗北乙女エクスタシー

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

全巻収録
1000冊以上
1000冊以上

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル!



女刑事美優
電撃は自らの身体で

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル!



小説家になるこの男性向けサイト「アクトアインノベルズ」から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の外伝作品もあり! 電子書籍でしか読めないオリジナル



フリーダム120%!? ジャンルにとわれないドキドキラブ!



4年連続ベストセラー
二次元ぷち文庫



異世界
デキる
ラブ

ドキドキラブなハarem系ライトノベル!

二次元ドリーム文庫